

---

# 隣人の告白

めくじら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

隣人の告白

### 【Nコード】

N6986A

### 【作者名】

めくじら

### 【あらすじ】

突然訪れた変わった一日。よかったら見てやって下さい。

それは、突然の出来事だった。自分でもいまなぜこんなことをしているのかわからない。

いつも思っていた。毎日がつまらないと。今もそうなのかといわれると答えはイエスだ。

あいつは真夏の日差しがまぶしい朝に俺の家を訪ねてきた。見たことがあるような顔だった。最初は思い出せなかった。そいつは俺を見るなりこう言うのだ。私は隣に住んでいるサンタクロースだ。手伝って欲しい、と。

・・・当然信じるはずもなかった。しかし、俺は繰り返しの毎日に現れたかすかな変化に興味をもった。誰かが自分をだまそうとしているのかもしれない、俺はその可能性をいまでも捨てきれない。それでも、その時そいつは真剣だった。何を思ったか、俺はそいつを家に招き入れた。

話だけを聞くとアホくさいような事だった。クリスマスの夜に送るはずだった少年のプレゼントがたった今完成したというのだ。そのプレゼントとはなんなのか、何度聞いても教えてくれなかった。俺は、教えなければ手伝わない、と言った。今、考えればあまりに幼稚だ。しかし、それでも教えようとはしなかった

その代わり、俺はそいつとある約束を結んだ。もし、手伝ってくれるならプレゼントを渡すとき、俺にそのプレゼントを見せるというのだ。確かに興味はあった。だが、それを知るために協力しなければならぬことを考えると踏み出しにくいのも事実だった。

自称サンタクロースは、迷っている俺に言う。

これは君にとって暇つぶしに過ぎないだろう、しかし、考えても

見たまえこのプレゼントが届かなかったときの少年の落胆と失望を。私にはそれが耐えられないのだよ。それとも君は、断らなければならぬほど忙しいのかな？ 違うだろう。君にはあるはずだ。その時間が・・・。

俺は言葉をなくした。認めたくないがその通りだった。今思い出してみると俺はこのときから少しずつ信じ始めていたのかもしれない。もしも、手伝う気があるなら今日の夜中の十時頃とある病院の裏門に来てくれと言いつ残してそいつは去っていった。

それから、食事のときも、テレビを見ているときも一日中そのことについて考えていた。でも、答えはすでに出ていた。

俺はなぜか人目を気にして家を出た。その病院は歩いて数キロのところにある。夏の夜は意外に涼しかった。疲れはなく、奇妙に聞こえるかもしれないが楽しかった。遠足に行く子供の期待の足取りのように。門の前にそいつはいた。来ることがわかっていたかのように俺を迎えた。

裏門は開いていた。隠れるそぶりもなく、病院の中へ入っていく。もうすぐ、面会終了の時間だ。しかし、入ってきた俺たちに見向きもせず、看護婦は事務を続けている。病院の中は明るいが外はもう真っ暗になっている。あちこちに紙で作ったリングとツリーのシールが見栄え良く飾られていた。

301号室の前でそいつは止まった。どうやら個室のようだ。なかから声が聞こえる。夫婦喧嘩かなにか知らないが、俺はそれを聞いていてなんとなく気分が悪くなった。自称サンタクロースはチャツと俺のほうを見ると、また向き直りスライドアを開けて中に入る。俺もそれに続いた。いよいよだと思った瞬間だった。

あなたにわかるだろうか、俺の気持ちが……。目の前に俺がいた。そこにいたのは少年時代の自分だった。言い合いを続ける夫婦

は俺の両親だった。思い出した。俺は小さいころ身体が悪く、よく入退院を繰り返していた。そのことで両親はよく喧嘩していた。

そこにいる俺は悲しそうな表情で外を見ていた。雪が降っていた。誰にも俺たちの姿は見えていなかった。部屋の隅には小さなクリスマスツリーが飾られていた。俺とあいつはただの傍観者だった。やがて、両親は小さい俺に何も言わず部屋を出て行った。扉が閉まると少年は糸が切れたように泣き始めた。いつまでも泣いていた。俺たちは部屋を出た。

俺は病室の向かい側にある椅子に座った。あいつは言った。

さあ、約束だったな。彼へのプレゼントを見せようか……。そういつて、いつのまにか持っていた小さな袋に手を入れた。

俺は言った。

あんたは本当にサンタクロースなのか？

そいつは袋に手を入れたまま黙っている。

……。いや、違うよ。あんたはそうじゃない……。そうじゃない。俺は顔を両手で覆って言った。

……。ありがとう。……。プレゼントは見ない。彼にあげてくれ……。そういつと、あいつは俺に笑顔を作って、そしてもう一度部屋に入っていた。そして、しばらくしてドアが開く。

そこに立っているのは小さい自分だった。少年はこっちを見た。

俺は思わず立ち上がった。少年は俺を見ている。

……。俺は昔ずっと欲しかった言葉があった。……。あの時あの言葉があれば……。

「……。あの……。あのさ、……。メリークリスマス。誕生日おめでとう……。」

ささいな言葉を受け、少年はうれしそうにして部屋に戻っていつ

た。しばらくすると、また扉が開き今度はあいつが出てきた。気になつて中をのぞくと、もう少年は寝ていた。満足そうな寝顔だった。あいつはゆっくりとドアを閉め、病院の出口へ歩き出す。俺はそのあとをついて歩く。

今度は正門を通り病院を出ると雪はもうやんでいた。暗い道を歩いて家に着くと俺は自分の家に、そいつも隣の家に入っていた。

実に不思議な体験だった。最近はそのつとはたまに顔をあわす程度だ。以前と何も変わらない。でも、変わっていくのかもしれない。今はそう思うようになった。

## （後書き）

ご愛読ありがとうございました。至らない点は多々あったと思いますが、読者の心に何か少しでも残っていたできれば幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6986a/>

---

隣人の告白

2010年12月10日20時48分発行